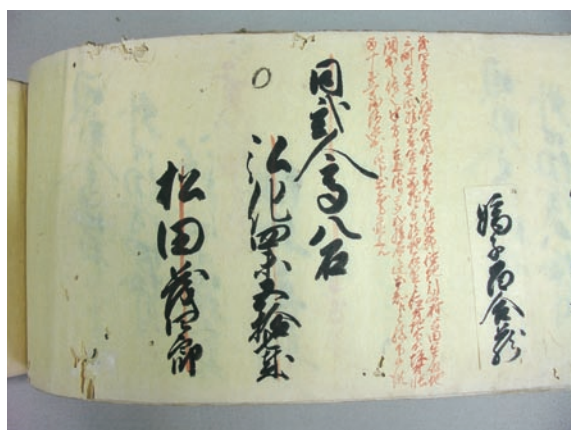
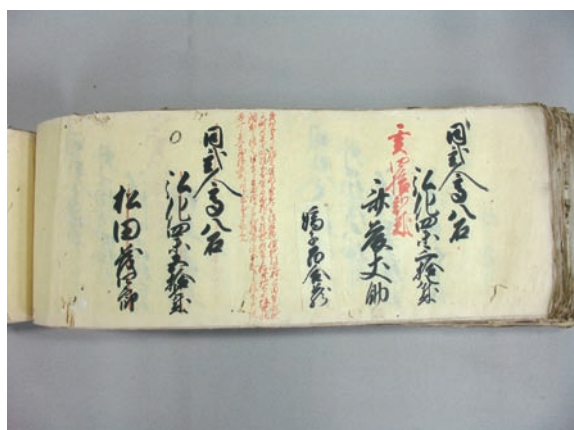


山口県史だより

第29号／平成24年11月

特集 「士雇」として仕えた人々



無給帳（「毛利家文庫」給禄、山口県文書館蔵）

分限帳と並ぶ萩藩家臣団の基礎台帳。分限帳は知行持ちの家臣を、無給帳は知行を持たない家臣を登載する。下の二葉は、本文で紹介する松田茂四郎の記載。

特集 「土雇」として仕えた人々

萩藩には、「本御雇」「御利徳雇」「同格」「身柄一代御雇」（明和六年（一七六九）に「土雇」として一括）といつて「士分」の扱いで諸役を務めた人たちがいました。「本御雇」は元々「大組」以下譜代の藩士の二三男に適用されたものでしたが、やがて「凡下」（庶民。士分に対していう）から「土雇」として出仕する人もあらわれました。今回の特集では、このうちの一つの事例を紹介したいと思います。

勤功書

ご先祖が庄屋・畔頭くろがしらや町年寄等を務めたお宅で、古文書を調査させていただくときに、最もよく目にする文書の一つに、藩が「苗字」「帯刀」「御目見」を許可したもののや、「大庄屋格」「大年寄格」などの榮譽を与える内容のものがあります。それらは、家のステータスとなるもので、代々大切に伝えられてきたと思います。

また、先祖から当代までの藩や地域社会に対して貢献してきた事柄を簡条書き（「勤功書」）にしてまとめ、「自分の家は、代々これだけのことをしてきました。ですから苗字・帯刀を免許してください。」といった内容の願書もよく目にします。

これらの文書類は、その家および居住地域の歴史について、その一端を知ることができ、調査・研究の足掛かりとなる貴重な史料です。

さて、村や町の役人や経済力を持つ人々のなかには、「土雇」として藩に出仕し、藩政の末端で実務能力を発揮した人々がいました。具体的な例を紹介しましょう。

松田家のこと

徳地宰判高瀬村（現周南市）の松田源左衛門幸邑という人は、当用米銀を献納したり、困窮の小百姓や「鰥寡孤独」の人々へ「米穀塩噌」を配るなど、地域の人々を経済的に支えていました。宝暦八年（一七五八）の秋、藩から隣接する巢山村の入庄屋を務めるよう要請され、難渋する村を立て直しました。また宝暦検地のさい実務に携わったほか、藩に対して検地費用として米三〇〇石を馳走しました。

こうした勤功によって「永名字」を認められたほか、「御利徳雇」として出仕することになりました。その後、明和元年（一七六四）の三田尻鶴浜開作築立のさい、米一二〇石を馳走した結果、「本御雇」となり、同年十月からは徳地宰判御紙仕組方・楮修補方役を務めることになりました。また右の開作事業では引請けた丁場ば（工事の受け持ち区域）を「抜群早く成就」させ、褒美として金子を拝領しています。同二年十二月には開作入目銀七貫五百目を馳走し、同四年に「三十人通」として召し抱えられました。

た。

続いて子息の安左衛門幸増は、安永五年（一七七六）から七年まで御武具方を務め、この間、日光御手伝普請があり、現場に派遣され、鍛冶方・飾方を兼務しました。その後、天明元年（一七八一）には長崎筆者役、以降は都濃郡御紙見取方・御普請方・山方、山代御作事方、御紙見取方、長崎筆者役、山代御紙見取方再役、山代・奥阿武郡御普請方・山方・御紙見取方・寺社方、山代銀子方、熊毛寺社方・御普請方・山方、熊毛・山代御紙見取方再々役等を歴任し、キャリアを積んだ結果、文化十三年（一八一六）の暮には「一代無給通」、文政三年（一八二〇）には「無給通」に昇進したのです（次頁の「無給帳」を参照）。

以上は「譜録」「無給帳」（山口県文書館蔵）や「松田家文書」によって確認できます。

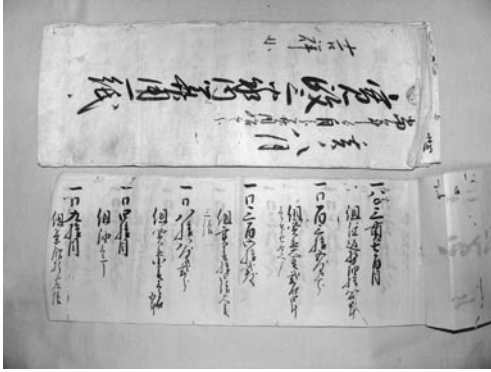
松田家の経営

右にみたように、松田家では藩に対してしばしば米銀を献納していましたが、それを支える経営がありました。同家には、「家内算用一紙」という家産を記した文書が残されています。毎年八月に作成され、①農産物・加工品等、②金融、③不動産・家財等、以上三つの項目について棚卸し（資産のチェック）をしていました。①には、仕込醤油・米・麦・大豆・茶・煙草・木綿・藍・炭・油・紙のほか、貨幣と質物が記され、②には当座帳・年賦且納帳・牛馬帳等々の元銀、さらに③には田畠・小古祖市の町屋敷

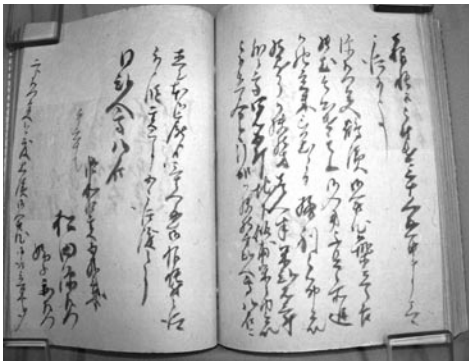
のほか刀・具足・牛の記載が続きます。すべて
錢換算で記されています。

②の当座帳等の帳簿が伝来せず、詳細につい
ては明らかにし得ませんが、金融による収益は
相当あったと考えられます。いずれにせよ、毎
年家産を増やしていったことは事実で、マルチ
な経営によって藩へ当用米銀の献納が可能と
なっていたと見る事ができます。

安左衛門の子茂四郎幸堅の時代には、「要用
撫育納金根帳」という帳簿が作られました。無
給通となつてから、江戸・京・大坂等での役務
に就くことが増加し、殿様や御姫様からの心付
や、仕事に対する褒美として金銀を下賜され
たものを無駄使いせず貯蓄にまわしていました。
これは「御馳走差上候得ハ、立身加増等被仰付
候」「家衰微之節浮沈之際ニ取出シ候而ハ、家
撫育之一廉扶助ニ相成候」と、この蓄えを先々



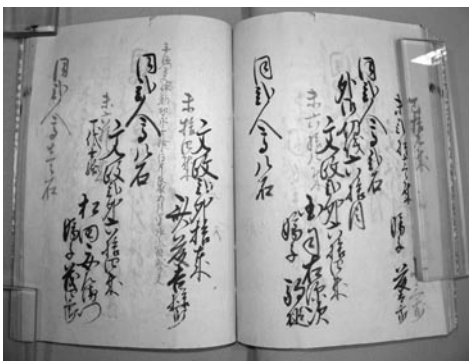
家内算用一紙(松田家蔵)



本御雇から三十人通へ



三十人通から一代無給通へ



一代無給通から無給通(「永無給」)へ

藩へ馳走して立身・加増を受けたり、家自体の
いざという時の備えとするという発想で、儉約
を心がけていたのです。

凡下から士分へ

「土雇」とは、明和年間に藩がそれまでにあつ
た「本御雇」「御利徳雇」「同格」「身柄一代御雇」
を一括してからの呼び名です。色々なケースが
ありますが、元来「本御雇」とは大組以下の諸
士の二三男を出仕させるための方便で、士分の
扱いで彼らを奉公させたのでした。やがて村や
町の役人層で行政手腕のある人や藩への勤功を
積んだ人々のなかから「土雇」として召し抱え
られるケースも増えていきました。キャリアを
積んで、空きがあれば「三十人通」として召し
抱えられるシステムでした。

松田家の場合、「御利徳雇」↓「本御雇」↓「三十
人通」↓「無給通」と立身し、茂四郎のとき、

嘉永二年(一八四九)には、徳地宰判引谷村で
「御馳走開作」四〇石を成就させた功績によつ
て、その半分の二〇石を「知行」として下賜さ
れました。ついに「知行」を持つことになった
わけです(表紙参照)。この開作も、萩藩へ仕
える傍らで、村での経営を発展させていた背景
があればこそ成し得たものでした。

松田家以外にも、近世中後期になると「士分」
に取り立てられて立身していく家がありまし
た。多くは庄屋・大庄屋等を務め、実務能力を
買われてのことです。歴史は一部の権力者のみ
によつて作られるものではありません。こうし
た家々についても、光を当てていく必要がある
と考えます。時代を下支えした多様な人々や家
を見つけていくためには、史料の調査・研究が
欠かせません。そして何よりその保存・保全が
重要だと思えます。(河本)

中世部会

壇ノ浦の合戦その後

今年のNHKの大河ドラマ「平清盛」は、平清盛の生涯を描いています。清盛の死後、平氏と源氏の争いは一層激しくなり、その帰趨を決した壇ノ浦の合戦は、山口県の中世史を彩る一大事件といえるでしょう。

ところで、壇ノ浦の合戦の後、安徳天皇の菩提を弔うために阿弥陀寺（現赤間神宮）が創建されましたが、中世期の阿弥陀寺の様子を、当時の紀行文などから窺い知ることができます。

連歌で有名な宗祇は、文明十二年（一四八〇）に阿弥陀寺を訪れ、御影堂の安徳天皇像を拝して、「あやしの身にも見奉る程、涙押さへがたし」と記しています（『筑紫道記』『史料編中世I』所収）。

このほかにも、当時の紀行文や和歌、漢詩文には、源平合戦と安徳天皇の悲劇について記したものが多く見受けられます。その記述からは、中世の人々の、源平合戦や安徳天皇への思いの一端を感じることができるとは、中世4』にも収録していますので、御覧になってみてください。

（担当 今地・古屋）



赤間神宮



関門海峡

近世部会

萩の豪商熊谷家

宝暦以降、萩藩の御用達として稀有な働きをした熊谷家くまがやについては、かつて福尾猛市郎著『熊谷五右衛門』（復刻版、マツノ書店、一九八四年）が初代五右衛門の活動を紹介しています。萩市今魚店町の熊谷家の主屋などは重要文化財に指定され、現在は熊谷美術館として伝来する美術品・古文書・道具類を展示するほか、建物・庭などを一般に公開しています。

近世部会では伝来文書について調査・分析を進めており、今後、初代以外の活動についても明らかにしたいと考えています。

熊谷家は御用達となつた宝暦四年（一七五四）以降、藩の命運を委ねられたといつても過言ではありません。当時、藩の大坂運送米（年貢米）は、上方町人に借金の形として押さえられていて、例えば不作等で米が不足すると、藩は熊谷頼みで穴埋めをしていました。一度に数千石の売買を命ずることもしばしばで、その資金力がずば抜けていたことが理解されます。

また熊谷家は上方町人とも交流があり、初代のとき、広岡久右衛門（加島屋）が萩を訪れたさい、同家に逗留しています。下の写真は久右衛門から贈られた石灯籠で、往時の交流を偲ばせます。

（担当 河本・宮崎・小田・岡藤）



熊谷家本宅



加島屋から贈られた石灯籠

「史料編幕末維新」最終刊「維新7」編集集中!

明治維新部会

古谷道庵は、下関市豊浦町宇賀本郷で医療や教育に尽力した人です。今回は、天保七年（一八三六）から明治十一年（一八七八）まで漢文で書き綴られた道庵の『日乗』（日記）の一部を紹介いたします。安政元年（一八五四）十一月七日「地震ひ人皆怖る」、同年十一月八日「関・府・小倉の地、過日の地震太甚だしく、府の一の宮の華表顛朴し、民家兩三墜せり。小倉の海水沸くこと六尺なり」この地震は、同年の東南海地震に続く伊予灘を震源としたもので、その後の余震や民衆の様子も記録されています。

元治元年（一八六四）七月十九日「常光庵の客が事を説く。客は是れ何人なるかを知らざるも、常人に非ず」、同年八月十五日「常光庵の客は中山侍大河内の五兵氏に移る」これは、下関を流浪した中山忠光潜伏の情報です。

その他、種痘普及の状況、長崎平戸で発生した「虎狼痢」の下関での猛威、感染の恐怖に駆られた民衆によるコレラ退散祈願の様子、四国艦隊下関砲撃事件を下関の街に向き見聞した様子や民衆の対外危機意識のほか、当時の天候、作物の収穫状況、諸物価変動、村民の日常生活などが、民衆の視点で記録されています。

『史料編幕末維新7』では、この大変興味深い『日乗』の一部を、読みやすく書き下して掲載する予定です。（担当 阿比留・岡松・村里）



古谷道庵日乗(下関市蔵)



本宮 中山神社(下関市豊北町田耕)

近代部会

夏、涼を求めて

昭和三年（一九二八）七月の防長新聞の連載記事「涼地とところどころ」。そこには、夏を迎えた県内のいくつかの景勝地の様子が紹介されています。

「長門峡に夏なし 青葉浴衣にうつろひ涼味肌にしみる」「笠山に明神池に萩は水郷涼しい処 涼味満腹の菊ヶ浜」「湯本温泉行進曲 鮎を箸に河鹿聴く 古刹大寧寺に史劇あり」。リズムカルなお国自慢の言葉が踊ります。「仙境倭山温泉」「秋芳洞の探涼」「海上アルプス青海島」「街路樹の長府街道を電車で夕涼み」などのうたい文句にも目を奪われます。各地の夏の趣に加えて、歴史・味・湯を織り交ぜたそれぞれの文章からは、当時の観光地開発の様子や集客のための工夫が見え隠れします。記事に添えられた写真も旅情をそそります。波の音、川のせせらぎなど、涼味に満ちた水辺の音風景の描写も、読者には一服の清涼剤だったと思われる。活字の間にちりばめられた涼やかな光景を思い浮かべるためには、現代人が失ってしまった豊かな想像力が必要とされているようにも感じられます。

昭和初期のこうした観光地案内は、絵葉書の作成、地図や写真入りのパンフレットの普及、さらには交通網整備とあいまって、「遠く」に「非日常」を求めた人々を旅へと駆り立てたのです。（担当 浅川・木下・田村）



昭和3年7月7日付『防長新聞』



青海島を紹介した絵葉書

現代部会

お手まぎのクロマツとヒノキ

去る五月二十七日に山口市阿知須きらら浜で「第六十三回全国植樹祭」が開催されました。山口県では昭和三十一年（一九五六）にもその前身にあたる「第七回国土緑化大会ならびに植樹行事」が開催されています。当時の天皇・皇后両陛下のご来県は県民の熱烈な歓迎によって迎えられ、会場となった防府市では、矢筈岳（やはず）でお手まぎが、また、毛利邸でお手まぎが行われました。

お手まぎされたクロマツとヒノキの苗について、昭和三十三年三月十八日の朝日新聞には、「昨年（昭和三十一年）三月十一日、山口市宮野の県林業試験所に移植されていたが、この三月の緑化運動の記念植樹に、すでに約八割が各地に配られた。県下十の教育事務所毎に一枚ずつの健康優良小、中学校、健康優良児のいる学校に二、三本ずつ。両陛下が（行幸の際）回られた工場、会社のほか主な社寺にも配った。」との記事が出てきます。また、三月十二日の同新聞には、「徳山市向道中学校はこのほど県を通じ、天皇、皇后両陛下お手まぎの松苗百二十本をいただいたので、卒業生男女五十九人の手で記念林の頂上付近に植えた。」との記事も見えます。両陛下がお手まぎされたクロマツとヒノキの苗は、県をあげての緑化運動に一役買っていたことが窺えます。

（担当 津枝・山本・林・河村）



当時のお手まぎの様子(山口県蔵)



昭和天皇、皇太后御手播樹(毛利氏庭園、防府市)

現存するお手まぎのクロマツとヒノキ



県史を編集するということ

近代部会では、「政治・社会・文化」と「産業・経済」、二つの大きなテーマのもとに五冊の史料集の編集をすすめてきました。各巻とも、対象とする時代の特色や世相を反映させて設定した章・節などの枠組みに沿って史料を選びます。そして、編成のストーリーと史料の選定意図や内容が述べられた解説文とともに近代の山口の諸相を描いてきました。

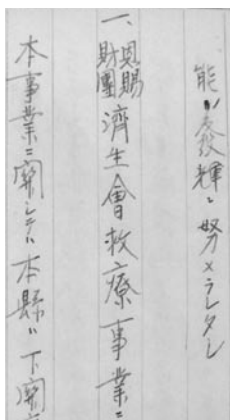
史料選定の手がかりとしてまず活躍するのが新聞史料。「いつ、誰が、どこで、何を」がストレートに伝わってきます。一方で、編集上意識しなくてはならないのが、出来事背景となる時代の流れの的確な把握です。たとえば県政をめぐる事件を理解する場合、「県会議事録」「県庁文書」「家文書」などから様々な視線の史料を探り出します。そして、個々の事件や事象だけではなく、時代の雰囲気や提示できるように、当時の県政の展開や方向性などにも言及した史料の抽出に努める必要があるのです。

収録史料が確定すると、校正作業が始まります。ゲラと史料を突き合わせて一字一句をチェックするだけでなく、読点や注記を加えることにより、史料の理解を助ける工夫を積み重ねていきます。直面している『史料編近代3』への収録史料は約五〇〇点。いくつもの季節のうつろいを感じながら、史料と同じ数の検討のステージを経て、仕上りの日を迎えることになるのです。

（浅川）



県政の基本方針や重点施策を読み取ることができる史料



校正のヒトコマ

原史料には「発揮」と書かれている。「発揮」の誤りと断定できるのだろうか。傍注は(ママ)なのか(発揮)なのか。時間をかけて検討するのが悩みは尽きない。

ふるさとの歴史を誇りに 刻まれているDNA・・・

タレント・リポーター

菊田あや子



私の生家は、今の海響館や唐戸市場のあたり、住居は三階でその眺めは素晴らしく、眼前に広がる関門海峡を堪能して育ちました。源平船合戦、先帝祭と華やかな祭に心躍らせ、艶やかな衣装をまとった太夫達の姿にうっとり、往時に思いを馳せたものです。数々の祭で下関の歴史を肌で感じ学び、赤間神宮から壇ノ浦一帯を遊び回り、貴族から武士の時代への変化を決定づけた舞台の地で育ったわけです。

ところが、こんな悠久の歴史ある地で育った私のルーツは？というところ、祖父母は他界しており昔話を聞くことはなく、商家でしたので両親とも忙しく、私は我が歴史には深く関心を持たず一八歳で上京しました。唯一知ることは、母方は源氏の子孫で世が世ならお殿様であったそうです。曾祖父は朝鮮総督府に在し、祖父は校長先生、曾祖母は凛として、如何にも武家のおばあ様。母や叔父達を厳しくも、とても大事に見守り育ててくれたそうです。私には大河ドラマの女優さんの姿が重なり・・・会いたかったです。

さて、県下では「明治維新150年祭」の様々なイベントとともに、皆さん歴史探訪を楽しまれているでしょう。四〇〇年前、武蔵と小次郎が決闘した巖流島。幕末から維新へ歴史を動かした重要人物、高杉晋作も下関で活躍しました。幼き頃、何度も訪れた晋作像ですが、わずか二七歳での早世が悼まれます。

数々の歴史の舞台となった下関ですが、私も志を抱き中央に挑んだ身、比べるのも烏滸がましいですが、どんなに熱き血潮・熱情であったことでしょうか。この本州最西端の地からよくぞ！と故郷の歴史を大きな誇りとしています。松下村塾の教えの一つ「飛耳長目」(あちこちに出向き見聞を広め自分の目で見て世の中をよく知ろう、の意)精神は長州人のDNA、私にもシカと流れると信じます。日進月歩の技術をもつてくれないタイムマシン、故に不変の歴史事実の継承は私達の重大な責務と痛感しております。

地域に根ざす・28



厚東郷土史研究会

本会は厚東を中心とする郷土史並びに郷土文化の研究および向上を図ることを目的として昭和三十八年(一九六三)四月に発足した。

「厚東氏」は南北朝時代には「大内氏」と比肩する豪族で、長門国守護でもあったが、大内氏の侵攻によって敗れて、およそ六五〇年前に滅亡して歴史の舞台から消えてしまった。その後時代は大内氏より毛利氏の時代となり、現代は厚東氏の歴史や業績については、ほとんど顧みられることのない世相となった。

昭和三〇年代となり、平中十郎氏ら厚東の有志は「私たちは久しく郷土の歴史を放任して来た。恰も無縁の者であるかのように」と回顧して、郷土の先人厚東氏の歴史の解明および文化遺産の顕彰を図ることを目的として、会誌『厚東』を昭和三十八年十二月十五日に創刊した。この時発刊のことばとして平中氏は、「厚東の歴史の研究と顕彰の役目を果たしてくれろのが、この会誌『厚東』でなければならぬ。このことは、ゆめゆめ忘れることなく、未来永劫に刊行すること」と述べられている。

本会は平成二十五年(二〇一三)に創立五〇周年を迎える。会員は多い時には五〇〇余名を数えた。また、会誌『厚東』も第五五集を刊行するに至っているが、この会誌で発表された研究論文によって、埋もれていた厚東氏の遺産の文化財や史跡が多数(二〇件以上)、国・県・市指定となっている。

(代表 沖金吾)

事務局 宇部市厚東区柵井上
電話 〇八三六―四一―二九六五
会誌 『厚東』(B5判)



会誌『厚東』

県史刊行の

お知らせ

◆『史料編 近世6』および『史料編 幕末維新5』配本

五月に、萩藩領長門部の諸家文書を収録した『史料編 近世6』を、六月には、幕末から明治初年の長州藩の経済に関する史料を収録した『史料編 幕末維新5』を配本しました。

◆『通史編 中世』配本予定

院政が開始された応徳三年（一〇八六）から一六世紀後半の毛利氏による防長支配の時代にかけての本県の歴史を、最新の研究成果をふまえて日本史の展開の中に位置づけるとともに、世界的な視点も取り入れて、多角的かつ総合的に叙述した『通史編 中世』を年度内に配本する予定です。

▼『山口県史』購入のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。
〒七五三―八五〇一 山口市滝町一番一号

山口県刊行物センター内 山口県刊行物普及協会

電話（〇八三）九三三―二五八三

FAX（〇八三）九二三―九一三九

こちら 県史編さん室

去る十月二十日、山口市の「山口県教育会館」を会場に第二一回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん専門委員の木部和昭先生（山口大学教授）で、「関湊繁栄録―近世下関の発展と中継交易―」と題して講演されました。

近世期において西国有数の中継交易港として発展を遂げた下関。その発展の要因や港湾都市としての特徴を独特の視点から捉えて語られた講演は大変興味深いもので、参加者を終始惹き付けました。

この講演の概要は、来年三月に発行する『山口県史研究』第二二号に掲載予定です。



講演中の木部先生

山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

【通史編】 6巻

既刊 原始・古代
中世
近世
幕末維新
近代現代

既刊 【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

既刊 考古1（原始）
既刊 考古2（古代以降）
既刊 古代（古代史料）
既刊 中世1（記録）
既刊 中世2（県内文書1）
既刊 中世3（県内文書2）
既刊 中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）
既刊 近世1（政治1）
既刊 近世2（政治2）
既刊 近世3（経済1）
既刊 近世4（経済2）
既刊 近世5（文化）
既刊 近世6（諸家文書1）
近世7（諸家文書2）
既刊 幕末維新1（政治・社会1）
既刊 幕末維新2（政治・社会2）
既刊 幕末維新3（政治・社会3）
既刊 幕末維新4（政治・社会4）
既刊 幕末維新5（経済）
既刊 幕末維新6（軍事）
幕末維新7（文化・海外史料）
既刊 近代1（政治・社会・文化1）
既刊 近代2（政治・社会・文化2）
近代3（政治・社会・文化3）
既刊 近代4（産業・経済1）
既刊 近代5（産業・経済2）
既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）
既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）
既刊 現代3（言論・文化 プランゲ文庫）
現代4（産業・経済）
現代5（政治・社会）
既刊 民俗1（民俗誌再考）
既刊 民俗2（暮らしと環境）
【別編】 1巻
年表

山口県史だより 第29号

平成24年11月22日発行

編集・発行／山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-933-4869